ダイズ紫斑病（病原菌：*Cercospora kikuchii*）

○ 被害と発生生態

糸状菌による病害である。

種子では表面に紫色の斑点を生じる。軽症のものは種子の一部であるが、ひどい場合には種皮の大部分、または全面が紫色に変じて品質の低下が著しい。種皮は裂けることが多い。子葉では円形または不規則の褐色ないし紫紅色の斑点を生じて早期に落葉する。また、成葉でははじめ紫紅色の斑点を生じ、のちに葉脈間を境に多角形になる。

紫斑病菌は罹病種子や被害植物体で越冬する。罹病した種子を播種したり、あるいは播種した種子の近くに被害植物体があると子葉や胚軸に菌糸が伸長して病斑を形成する。紫斑病菌は 20 ～ 30 ℃で最もよく生育し、初春から初夏にかけて湿度が高くなると分生子を形成し、この分生子が伝染源となって二次感染を起こす。

○ 防除方法

（ア）耕種・物理的防除

・感染しにくい品種（サチユタカ等）を作付けする。
・無病種子を播種する。
・連作を避ける。
・適切な肥培管理を行い、過繁茂を避ける。
・適期に収穫し、速やかに脱粒調製する。
・被害植物残渣を適切に処分し、ほ場衛生に努める。

（イ）薬剤防除

・種子消毒を行う。
・開花期後 30 日前後に１～２回薬剤散布する。
・トップジンM剤、ベンレート剤は耐性菌が出現（平成８年 79.2 ％）しているので、薬剤を散布しても効果がない場合は、これらの薬剤を他剤に変更する。

被害粒